

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
（毎月一回一日發行）
昭和十九年一月廿日印刷納本・昭和十九年二月一日發行

第十卷 第二號

二月號

浄土



安西覺承著

法然上人の和歌

B6版六十四頁 定價五十錢 送料四錢

上人の御作として確實な和歌二十首について一々懇切な語意、通釋、感想をのべた和歌註解の定本。上人の法の歌の中によく御遺徳の結晶をみる。

増谷 雄著

行 試 上 人

B6版二百三十頁 定價一圓五十錢 送料十二錢

近世不世出の高僧、歌にしてしかも脱俗洒々たる上人の風格、言行がそのまゝ信仰の現れである。上人に傾倒する著者が渾身描き出した全傳成る。

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京 八二一八七番

林 靈 法 著

法然上人を憶ふ

B6版四四〇頁 實 費 三 圓 (送料共)

著者は思想上に懷疑懊惱を續け、遊に凡入報土に救はれた體驗を通し、告白と懺悔の内に法然上人の教義をつづつた。

本會で取次ぎます

○振替にてお拂込みの場合は何れも十錢増○

淨 土 二 月 號 目 次

表紙・巻頭カット……………月岡榮吉

千 慮 不 惑……………江 藤 澂 英……………(一)

東 洋 と 西 洋……………吉 田 絃 二 郎……………(二)

比島 アーリントンの 風景 おばあさん……………永 井 保……………(七)

手 帖……………子 母 澤 寛……………(四)

民 族 を 越 へ て……………石 原 惺 堂……………(二四)

信 仰 相 談……………(二〇)

歌 壇……………岩 野 喜 久 代 選……………(九)
俳 壇……………太 田 耳 動 子 選……………(二四)

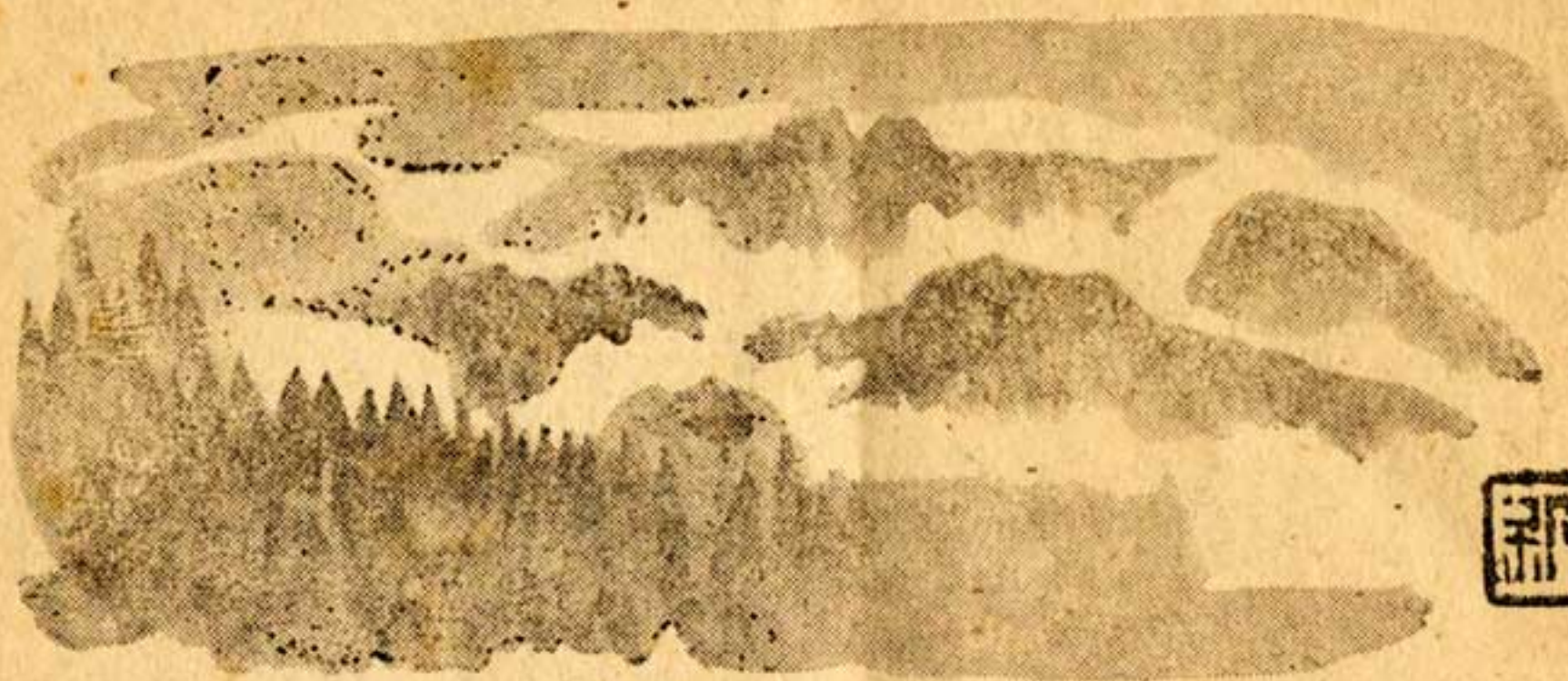
宗教 と ち ん ち ん 物 語……………糸 山 天 眞……………(三)

法 語 葺 間 に 月 や ど る……………中 村 辨 康……………(二五)

編 輯 後 記……………(二六)

第十卷 第二號

淨 土



千 慮 不 惑

淨土宗教學部長 江 藤 澂 英

舊臘湘南伊東に至り白雲閣に宿す。偶々楣間に掲ぐる扁額に東郷元帥の筆になる謹嚴なる『千慮不惑』の四文字を仰いで感慨禁じ得ざるものがあつた。過ぐる日露の戦役に皇國の興廢を双肩に擔つて日本海の一戦に臨まれた元帥が、旗艦三笠の艦上でこの語句を書かれたといふことを小笠原中將のお話で承つたことがある。如何なることがあつても所信に向つて直進する、即ち千慮不惑といふことは蓋し最も大切なことである。殊に現下の如き凄愴苛烈な決戦が續けられてゐる時、軍官民舉つて一國一體、貫くに忠誠の一心を以てし、大山の如くゆるぎなき不惑の信念を堅持せねばならぬことは云ふ迄もない。

われ等は武力の戦ひは皇軍を信頼して毫も不安はない。しかし今度の大戦が單に武力の戦ひに止まらず、所詮は心の戦ひであるとすれば一億國民の一人一人が戦ひ抜かねばならぬ。流言蜚語、謀略宣傳、人心攪亂の魔軍に對しては必ず勝不惑の金剛心を以て向ふ外はない。

法然上人は「深心と云ふは決定して心を立て、佛教にしたがひて修行してなかく疑心をのぞくなり。一切の別解別行、異學異見異執のために退失傾動せられざれ」と諭され、「往生は不定と思へばやがて不定なり、一定と思へば一定することにて候なり」と淨土の信念を訓へられてゐる。われ等念佛の行者はいつでも不惑の信念に住すべきである。畏くも大詔を拜した以上は、大御言のまゝに最後までやらねばならぬ。千慮不惑、必勝の信念を堅持して忠誠一途に征戰の目的達成に邁進すべきである。

東 洋 と 西 洋

吉 田 絃 二 郎

十數年前はじめて多摩川の近くに住むやうになつたころは、朝、野良にゆく青年たちが、巻藁をくゆらし、絹の襟巻を首にまきつけてゐるのを見たものであつた。わたくしは故郷の素朴な青年たちを思ひ浮かべて、暗い心になることもあつた。

このころ、毎夜おそくまで、近所の青年たちは寒風にさらされながら、裂帛の聲を絞つて銃劔術に夢中になつてゐる。十餘年前のことと考へると隔世の感がある。

蠶に純朴な青年に絹の襟巻をまかせたのは國家に確乎たる方針がなかつた罪である。政治家たちが國政を私してゐた罪である。國民は、殊に感激し易い青年たちは、國家が確乎たる大理想を示しさへすれば、

絹の襟巻をかなぐり捨て、直ちに銃劔を執つて、戦場に向ふものである。それにしてもありがたいのは、このころの青年の心かけである。風すさぶ霜夜に、武藏野の到るところに、青年たちの裂帛の聲を聴く。犇々と身に迫る戦争を感じるとともに、まことにありがたい、生き甲斐ある世にあることを思ふ。

今朝、北海道の友人からたよりがあつた。

牧場に働く人も、或ひは戦野に召され、或ひは工場に行き、今年は牧草の貯へが少ないので案じてゐたが、數日前突然見知らぬ傷痍軍人の來訪を受け、勵いてもらふことになつたので大助かりであるなどと書いて來た。

「その傷痍軍人の友人で、やはり同じ病院にゐた戦友で、羊の世話をしたいといふ人がありますので、その人にも來ていたゞくつもりです」ともしたゞめてあつた。それからまた女の子が生まれたことも知らせてあつた。「こ

れまで男一人、女二人でしたから、今度は男の子だらうと決めてゐましたので、子供たちもその氣でゐましたが、女の子が生まれました。それで子供たちには、——神さまのお考へで女の子の方がよいと思ひなつたので、女の子が産まれたの——と言つてやりましたら、子供たちもうなづいてゐました。この女の子には羊を飼はせて、できるだけ大自然の中で、自然のまゝに育て、ゆきたいと思つてゐます」と書いてあつた。この友人は東京高師の附屬中學から商科大學を卒へたが、在學中からも商業などとは縁遠い哲學や思想、文中からも商業などとは縁遠い哲學や思想、文藝といふ方面に、興味を持ち、先祖代々の日本橋の老舗の暖簾を捨て、二十餘年前北海道の原始林に入つてしまつたのであつた。わたくしは世の中に絶望を感じるやうなことがあつても、この友人の尊い生活を想ふことによつて、一條の光明を見出すことができるので

あつた。大きな木を伐り倒しては、一挺の手斧で、胸をくりぬき、風呂桶代用のものを作るに幾十日を費した話などを、知らして来たこともあつた。初めて生まれた女の子が就學年齢に達した。學校の在る町までは四五里の山路が横たはつてゐる。友人は子供を馬に乗せて、町まで出かけて行つた。馬の鞍には犬張子や鞆やいろいろの玩具も結び付けられてあつた。一週の中二日だけ町の家で預けて學校に通はせ残りの四日は山の牧場で、友人夫妻が先生代りをするといふ方法を探つた。ピアノだけは四五歳のころから牧場の家で稽古を始めたといふことであつた。今朝も友人の手紙を読みかへしながら、わたくしは、周囲の人々の杞憂を裏切つて、見事に大地に根を生やした友人の生活の尊さを思ふ。雪も吹き荒ぶであらう北海道の曠野に、今日もかれは羊や牛、馬を相手に靜かに人生を思惟しつゝあるであらう。

裏の竹林の片隅に黄色に熟れた柚子の實がたゞ一つ轉がつてゐた。わたくしは一瞬の柚子の實を掌に載せて、じつと眺めてゐた。何といふ俳味豊かな形であらう。その肌の凸凹多く、豊かな陰翳を宿し、その形の示す曲

線のやゝもすれば無愛想な、人に媚びぬ趣を見せるのが却つて人の心を惹きつける。しかも幽香すでに三月の花を懷はしむるものがあり、花よりもさらに玄にして深いものを感じせしめる。いつもは數百顆の實を見せてくれるのであるが、今年はわづかに數個の柚子を見せたに過ぎなかつた。それだけに一層たゞ一顆の柚子に對してありがたさを感じることに深い。西洋に於ける近代美學の一つの發見は路傍の石塊にも生命の動きを感じ得たことであつた。しかしこのことは東洋に於いてはすでに遠い時代から、常識となつてゐた。路傍の一莖の草にも土塊にも、東洋の畫人たちは、生命を感じてゐた。西洋人は長い時代人間のみに生命を感じてゐた。肖像畫の發達した所以である。東洋の畫家たちは人間と自然を均しく天に依つて作られた生命として取り扱つた。東洋に山水畫の發達した所以である。

西洋人は人間と自然とを區別する。差別の世界に生きる。すなはち民族を差別することの選民思想に倣居することになる。その典型的な民族はアングロサクソンである。大東亞戰を境として物の見方、美の味ひ方も東洋本然の姿に立ちかへりつゝあることは

よろこばしいことである。すべての宗教が東洋に於いて生まれたことを考へても、いかに東洋人そのものが本質的に深いもの、悠久なものを持つてゐるかといふことを證據立てゝみる。わたくしたちはこの信念、この矜持を忘れてはならぬ。この深い悠久な宗教的な生活を忘るゝ時、わが民族の尊さを失ふことになる。

けさは裏の林に懸巢が鳴いてゐる。のじこやかしらだかも鳴いてゐる。梅はまだ霜も堅いが、春も遠くはあるまい。靜かな日本の春を思ふにつけても、祖國日本のありがたさが身に沁みて感じられる。それにつけても今こそ、尊い日本を守るため一人残らずすべてのものをさへげて死力を盡すべき時である。鏖せり合ひといふことがあるが、今こそ敵味方鏖せり合ひの決戦である。もし油斷して、またたき一つしても、取りかへしのつかないことになるといふことを知らねばならぬ。





手 帖

……遺拾門衛左次村有……

寛 澤 母 子

櫻田門外で井伊大老の首を打落したのは水戸藩のものでなく、薩藩のものでなく、薩藩の有村次左衛門であつた事はみんな知つてゐるが、これは其場の奮闘によつて、勇猛の次左衛門が殊勳をたてたのではなく、首を斬るものは次左衛門と、襲撃計畫のはじめから決定してゐたのだ。

大體この一舉には、薩摩側からは有村雄助、次左衛門の兄弟二人が参加する事になつて、むしろそれ迄の活動は雄助に多かつた。それがいよく實行の段になつて、水戸の總

を挺して櫻田門外に死のうといふのに、今、弟一人をここへ残してその戦死を外に自分が一刻も生延びる事は武士としてよく忍び得るところではないから、自分は飽迄も弟と刃をつらねて大奸井伊を討つのだといつてきかない。

そのお氣持は尤である。しかしわれ／＼はうまく上洛をし得たとしても一刻半刻、命が長らへるといふに過ぎないでせう、所詮は先きが知れてゐます、恐らくは令弟が三途の川

帥ともいふべき金子孫二郎が、首を取る迄はわれ／＼でやるとしても、その後朝廷との關係、乃至は在京の各有志の連絡などは、現在幕府のためににらまれてゐる水戸ではどうしても都合が悪く、一に薩摩の力をお借りしなくてはならない、それには有村さん、あんたが、この一舉と同時に私と共に上洛して運動の取なしをして貰ひたいといふ。雄助は、いやそれはいけな

までは行かれぬ中に追つき得るでせう。櫻田門外に死するも亦た本懐ではある。が、一歩遅く来て、もう一仕事をし行こうではありませんかと、金子は口を極めて説き、また同志の人々も頻りに説いたが、それでも承知をしないので、それでは令弟次左衛門さんになたと二人分働いていたゞいて、大老の首は必らず次左衛門さんに擧げて貰ふといふ事にしませう、と、同志が悉くその殊勳を次左衛門に譲る事を條件として、やつと雄助は得し、金子と共に上洛、一舉後の運動に當る事になつたのである。弟が死の直前にあげる殊勳に微笑して雄助は、あの三月三日朝、金子と共に江戸を發ち、鮫津の川崎屋で、一舉成功の吉報を待つたのである。

駕籠中の大老へ初太刀を突込んだのは稻田重藏、二の太刀が海後薩摩之介。それでも息の止まりそうになつてゐる大老を路上へ引き出し鬨の邊りへ先づ一刀をくれ、二の太刀で首を斬落したのが次左衛門。刀は關の光、俗にいふ孫六三本杉で、二尺六寸。奈良原喜八郎のものを借りてゐたのだといふ。初太刀の稻田の刀は備前祐貞で、金子孫二郎から貰つたもの。この時はみんない／＼刀を持つ

て行つた。二尺四五寸から三尺近い頭丈なものを運び、中には一擧の直前に水戸の名匠にわざ／＼うたせた人もある。

次左衛門が、大老を討つてその首を刀へ突さし、「よか」「よか」と連呼しつゝ行こうとするのを、長州屋敷の表門長屋下まで追ひかけて、突然うしろから斬りつけたものがある。餘程不意であつたと見え、それに首を討つて安心して油斷をしてゐたか次左衛門は長さ四寸、幅七分の大疵を後頭部へ受けて終つた。斬つたのは井伊家の小河原秀之丞といふ人、主君忠勤の士であつた。

この疵の爲め、次左衛門は遂に近くの若年寄の遠藤但馬守屋敷の辻番所の前で、大老の首を傍に置き切腹して終つた。臍の上、四寸、一寸切上げて一旦うつ伏したが、何しろひどく疲れてゐるのでうまく行かなかつたものか人の足音をきいては、三四十分の間、頻りに介錯を頼んでゐたといふ。

尤も疵はこれ許りでなく、戦鬪間に、喉から左の襟へかけ突疵一つ右の手の方へ三寸五分、左の人差指切り落されて無し。左の目上で深さ二分長さ三寸。

死體は一旦小塚原に埋められたが、文久二年、遺骸は薩摩へ、首は芝白金の瑞聖寺へ改葬、その後、どういふ都合でか品川海安寺へ再び改葬、明治になつて、長兄たる海江田信義子爵により、青山墓地へ改葬された。その頭蓋骨にはあきらかに、小河原の一刀の痕があつたと、海江田子の談が残る。毛髪と齒は別に器に移して安置した。

次左衛門は廿三だつたが、年にも似ず、歌もうまし、字も上手である。殊に手紙はなか／＼の美文であつた。いよく一擧の爲めに藩邸を出る時に、外出の願書を上げてあるが、どうにも止むを得ない事があつて外出したいから極々内分にて今夕までは是非お許しをいたゞきたい、しかし、斯様の事は「二度とは申さじ」と、その邊、今日は死ぬと堅く心に秘めたものが、ほの見えるような文の運びで、實にいゝものである。

大體は父上は藩の庖丁頭、兄は茶道で御奉公をする、自分も中小姓といふような仕事で、どちらかと云へば、武道には縁のうすい方である。次左衛門が頻りに辻斬をやつて、九段の牛が淵で千葉周作へ斬りつけた、とこ

ろが一たまりもなく周作に取つて押さへられたが、この時、周作が組伏せておいてそつと次左衛門の畢丸をさぐつた。こうした場合に、そのふぐりが、だりりとしてゐるような奴ならば大丈夫、縮んでゐる奴は駄目だといふ。

ところが次左衛門は人一倍だりりとしてゐたので、周作は、お前は見込のある奴だが人を斬らうなどいふのは馬鹿だ、その心を改めて勉強したら何んとか物になるだらうとさとし、次左衛門もこれに感じて、翌日から周作に入門して劔を磨いたなど、見て來たような話をつたへるが、これは恐らく嘘だらう。辻斬の畢丸をさぐる程に周作も物好きではなかつたらう。

次左衛門の兄雄助は、一擧成功の報を川崎屋に受けて、直ちに上洛したが、途中金子と共に伊勢四日市の旅宿に自藩のために押さへられた。これは、薩摩が雄助を幕吏の手へ渡しては大變だと思つて追跡させたものである。大老はやられても幕府の勢力はまだ／＼だ。薩摩もそれを考へなくてはならぬ。とう／＼雄助が自分の國へかへり、自分の家で切

腹したのは閏三月廿四日の夜明けで、一撃から五十日の後。

その死の直前、夜を徹し、この弟の口から親しく事件の顛末をきき、自からこれを筆記したのは長兄俊齋、即ち後ちの海江田子爵である。

雄助は一々、親類同志に面會して判れを告げ、最後に、母の蓮子にその先立つ不幸を詫び、親友奈良原喜八郎の介錯によつて身首處を異にした。辭世は、わが命あらむ限りは、すめらぎの、大内山にちりはたてめや。次左衛門とは三つ違ひの廿六であつた。

*

次左衛門の母蓮子は、後ちに蓮壽院と稱し、明治廿九年八十八歳まで長壽を保たれたが、なか／＼偉い人であつた。酒と煙草が好きで、それを樂しみにしたが、學問もあり、歌も上手で、その操志は、男子の上であつた。一撃の前年霜月廿九日次左衛門に宛てた手紙に、

扱江戸おもて、何かと六ヶ敷の中と相成との事、とかく事にのぞみ候せつは、一寸もひかぬと申され候事は、よく承り候、うれ敷存じ参らせ候、

雄々敷も、君に仕ふるものゝふの母てふものはあはれなりけり

一時のけたい、まつ代の名となる、よく學び玉ふべし、からだは大切にいたさるべく候、武運長久を祝ひ、かつ男武しおくりしんせ候、めでたく、かしこ。

この母からのたよりを貰ふ前、次左衛門の差立てた手紙に、こつといふのがある。

當年中存命之處はむづかしく候、向後共、有之由御聞被遊候時は、吾々共眞つ先に御座に付き、左様召可被不候、皇族は勿論、御國家の御爲め武士の冥加、其時は御喜被成下候御願申上候

今年中の存命はむづかしいとは、天晴れの決心で、日本は古來すでに若冠にしてこの大丈夫の心ある國柄である。これが連綿として特殊潜航艇につながり、學問奮戦の物語に繋がる。

*

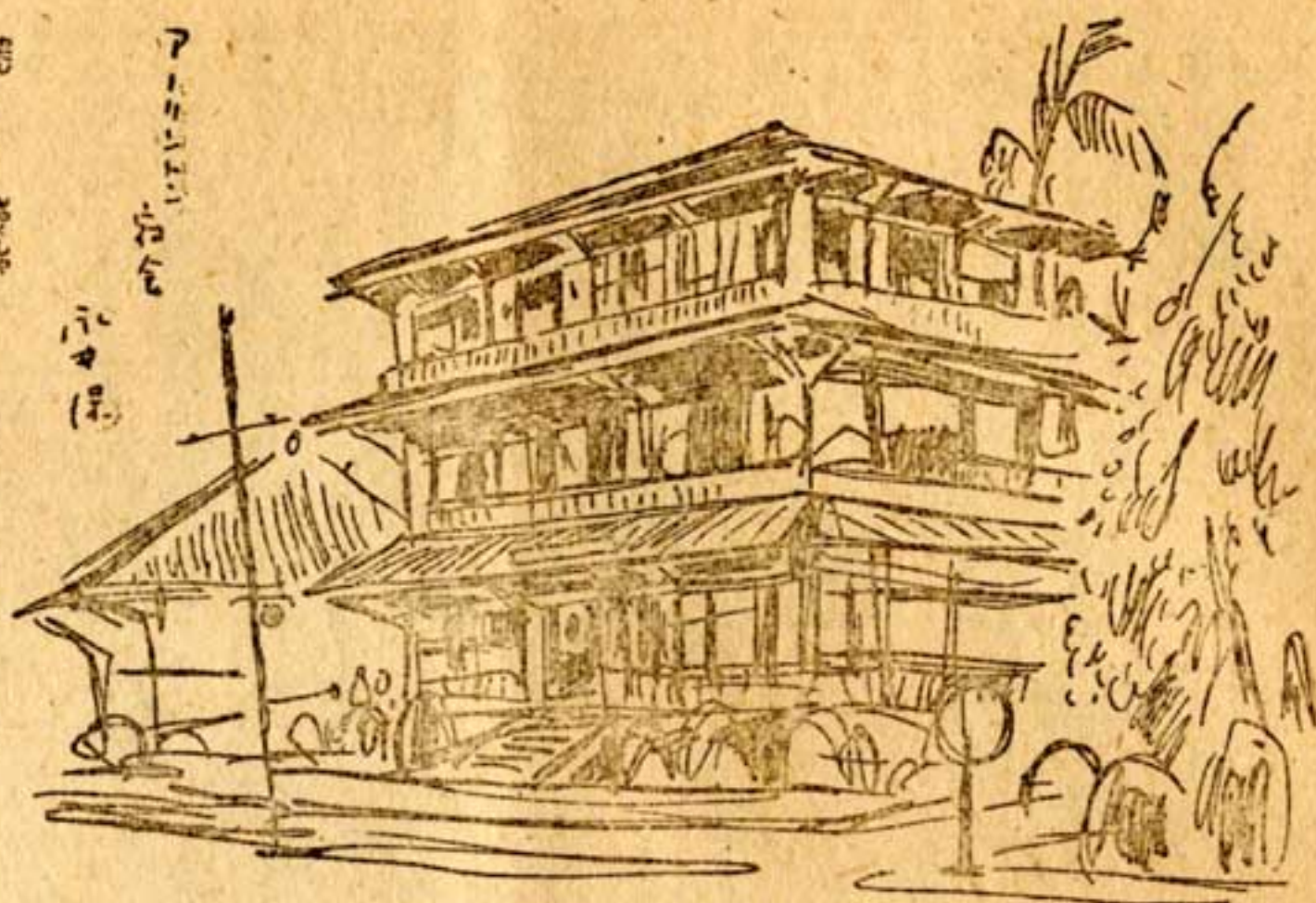
若い次左衛門に女の話が少しもない。目下部伊三次の未亡人が、養子にほしがつたのは事實だが、その對照たる娘さんがあつたのかどうかは知らない。たゞ目下部は元薩藩の出で、伊三次の父が浪人して水戸に寄り更らに

伊三次が最後に薩藩へ戻つたもので、元來が薩藩だから、伊三次の死後同志がその家を殘す事に心を砕いた結果、有村俊齋即ち信義が、伊三次の出た本家海江田家をたてる事となつたものである。

それはとにかくとして、次左衛門も若いもの、事によつては同志と共に、吉原品川と遊んだ事もあるらしく、二月廿七日、即ち一撃の六日前の日付で、吉原元海老屋から受取一通が、切腹の次左衛門の懷中にあつた。

一、晝夜二分 千とせ玉越。一、一分 者二つ。一、台二分。一、二朱 肴一檢。一、二百文、御膳。一、二朱 藝者。一、一、六百文、酒四升。一、金二兩一、四百文同志と共に遊興であらう。相當な豪遊のうに見える。

この外に、浪中にあつたのは、品川から大津までの先觸書、これはもし無事だつたならば直ちに上洛する目的のためである。それからきみがため、身をつくしつゝ健男の名をあげとふる時をこそまつ歌一首。それにもう一つ、兵糧菓子二つあつた。上洛潜行の用意の爲めであつたらう。



〇……比島風景……〇

アーリントンの

おばあさん

陸軍報道班員

永井

保 (文と畫)

面と云はれてた。

内地と同じに、マニラの山の手方面に住ぶ人は、お勤め人が多いようであるが、特に目立つことは、外國人の至極多勢住んで居ると云ふことである。

だいたい、マニラは、あらゆる國の人が混住してゐるところであるが、とくに山の手に、それ等の國々の人のなかで、比較的暮しの良い人たちが、豪壯な住宅を構えてゐるところで、戦前米國人の住んでゐたとおもはれる、贅澤な家が、ひっそりとした空屋になつてゐるのも見受けられた。

私たちの宿舎・アーリントンアパートはマニラのダコタ街といふ静かな住宅街にあつた。この邊はマビニーといふキャバレーやバーがたちならぶ繁華街と、イサツクベラルといふ、アカシヤの並木におほはれた、散歩道路とがあり、この附近一帯を指して、マニラの山の手方

私たちの宿舎である、アーリントン・アパートも、元はアメリカ人の經營してゐた建物なのであるが、經營主があまり老齡であるので、一

たん收容所へ入れられたのを、軍の情で釋放されて、このアパートの一室に安居してゐた。

この主人が、七十一歳で細君が七十二歳であつた。

細君はとても大柄で、全然耳の聞えないよぼくのおぢいさんを、いろ／＼と面倒をみてゐた。

子供は一人あるのだそうだが、今はアメリカへ行つて勉強中であるといふ。しかし便りがたまに來るだけで、永いあひだ會はないのでとても淋しそうで、小猫を一匹飼つてゐて、それを大切そうに可愛がつてゐた。

この猫の顔がとてもおぢいさんに似てゐて、啼聲がとてもおばあさんに似てゐた。性質はアメリカタイプで、たまに御馳走をや

らふと手を出すと、御馳走と一緒に手までくわえると云つた具合である。

猫のアメリカタイプは、やはり主人の氣性を反映してゐるのだらふ。

私たちがその宿舎へ入るについて、軍から交渉があつたときのことである。

ある。

このアパートを軍が使ふかわりに、おまへたち夫婦を收容所から出して、こゝへ住はせてやる、と云つたことが、有難ふございますと云ふまへに、それでは、軍からこの建物の使用料を、いくらくれるか、と云つたそうである。それでは、彼方たちは、また收容所へお歸りなさいと云はれて、いゝや結構です、お金は要りませんからどうか、我が家へ住はせて下さいと云つたそうだ。

間もなく、私たちはバター半島に立籠つて、死物ぐるひで抵抗してゐる米比軍を撃ちに大擧

出動した。敵をコレヒドールに於て止めを刺し、また宿舎へ歸つて來たのは二ヶ月後であつたが、その時我々は大半病人であつて、マラリヤとかデング熱の高熱で悩まされてゐる人が宿舎をうめてゐるありさまであつた。

フーリン・トラ
まゝ、まゝ



ある時、やはり私もマラリヤで病床にふせつてゐて、體の震えをじつとこらえてゐると、同室の野牛君が、食堂から上つて來て「とうたうこゝのおぢいさんもあの世へ行つたよ」と階下のおぢいさんの部屋へ耳を澄ませるやうな格好

をして云つた。聞けば病名は老衰であると云ふ。私も悪質のマラリヤに患つて、あの世が近づいてゐた時でもあつたので、縁起でもないと

陸海軍病院「慰問浄土」

寄附者芳名(敬稱略)

- 五圓 東京都芝區芝公園 廣度院 ○三圓 同小石川區久堅町十一 近藤國生 ○二圓七十錢 山口縣豐浦郡特牛港 石井榮助 ○二圓五十錢 大津市今堀町今然寺 久野眞成 ○二圓 東京都芝區芝公園浄土宗務所 石田海彰 ○一圓五十錢 靜岡縣富士郡原田村 清岩寺 ○一圓五十錢 横須賀市佐島福本寺 山本德英 ○一圓五十錢 兵庫縣城崎郡豐岡町 西垣みつ ○一圓四十錢 新京特別市常盤町一丁目六 安田兵吉

篤志寄附者芳名

左の通り當會活動資金にと篤志寄附下されました。

金十圓也

天津興亞第一區福島街五〇ノ二

中戸川洋行内(天津、天津寺扱ひ)

佐々木達子殿

壇 歌

岩野 蒼久保



京都 竹内 修 吾

安らけく明けたる空を仰ぎつつ
國も兵に祈り捧げぬ

(評) 重大超非常の戦時である。併し元
且は安らかに明けた。緊張の中にも
おほらかな伸びやかな心地で作詩は
前線の兵の武運長久を祈るのであ
る。ここには積極前進の明るい希望
と感謝があつて、消極の悲痛はない。

高崎市 大塚 光 高

雪ぞらの下に山茶花咲く村に歸

りたまへりみ骨となりて

(評) 餘情惻々としてせまる歌である。
悲しいとも何とも書いてないが、ふ
るさとの寒い師走山茶花の咲く雪も
よひの村へ遺骨をむかへた感慨がし
んみりと滲み出てゐる。情も景も合
致してゐる。

兵庫縣 水谷 良子

かへらじと思ひし人の歸り來て

稻刈りたまふ小田の夕ぐれ

(評) 農繁期、増産に挺身する百姓は猫
の手も借りた位だ。兵隊に出た良
人にかはつて馬力をかけつつ妻は一
生けんめいだ。ところが兵隊さんが
退ひもよらず一休暇を頂いて歸つて
來た暗くなるまで稻刈りをして下さ
る。ありがたいことである。

京都 福島孝治郎

體あたりその指揮官機仰ぎつつ

哭かざる神も人もあらめや

東京 上野 昌子

島國の朝は海よりあけゆきぬた

ゆたふ波を日の紅く染め

北海道 花田 順 往

東の大海原にさしのぼる初日

の光り仰がぬはなし

滋賀 奥松みさを

戦死せば先づこの包み開けよと

新妻われに征く人の云ふ

北海道 山崎 富士子

私の悲しみ何ぞをみなわれ嚴

しき御代を生きぬき行かん

別府 渡邊 實 雄

なすなきに恩賞に入る畏さよ亡

き戦友おもひ涙あふるる

兵庫縣 辻垣 彌太郎

傷痕癒ゆる日を疑はず一筋に七

度生れ國に報いん

神奈川縣 和田谷 みえ子

一すぢにたのむこころの白道を

ひたに求むるわが心かな

おもつたが、敵國人で

ありながら、こうして

自分の家で死ぬことが

出来て、おちいさんも

幸せであつたとおもつ

た。その明日お葬式の

當日は、アメリカ人は

皆收容所へ入つてゐる

ので、會葬者は三國人

が五大人來てから教會

へ出かけて行つた。

私たちは、同宿のよ

しみで、一人一圓づゝ

出して宿舎全體で相當

の香奠をおばあさんに

あげた。

おばあさんはその時

一緒に居たスイス人と

顔を見合せ、びつくり

した様子であつたがサ

ンキユを繰返して受取

つた。

になつたおばあさんは、それからとても人なつ

こく、私たちに話しかけるようになった

今まではこちらが敵國人とおもふことに、お

ばあさんも私たちをそう見てゐたらしいが、何

でもたいていのことは聞いてやるし面倒をみて

やる私たちの態度が判つたのか、毎日のように、

私たちの集つてゐる食堂へ來ては、小猫の啼く

やうな聲を出して話しかけて來るやうになつた

態々私たちが内地へ歸ることになつて、みん

な自動車に乗り終つた時、おばあさんが新らし

い小猫をかゝえて玄關まで出て來て片手をあげ

ながら何か云つてゐた。傍に居た村上通譯に、

おばあさんは何と云つてゐるのかと聞いたたら、無

事航海を祈ると云つてゐるのだと云つた。

その當時、コレヒドールの附近にアメリカの

潜水艦が出沒すると云ふ噂がしきりに飛んでゐ

た時なので、おばあさんの云ふことが何か皮肉

のようにも聞えたが、みんなでサンキユーサン

キユーと手を舉げて應えてやつたら、片手にし

てゐた小猫を放り出して、兩手を高くあげ、涙

をポロポロ流しながら大聲で何か云つた。

また傍に居た村上通譯に、おばあさんは何と

云つたのかと聞いたたら、あれは日本語でアリガ

信仰相談

(質問歡迎)

擔當 中村 辨康

戦死と生死解脱

(問)

(一) 皇軍將兵が大君の爲に生死を超越して勇戦して下さつて居ますが、まだ佛教を知らぬ方々であつても、事實として佛道を實踐して居られるのではないかと思ひます。さすれば佛教信仰なくとも立派に生死解脱が出來て居ると思ひますが如何でせうか。

(二) 小我を捨て、大我に生きる刹那(即ち戦死の時など)「萬歳」と叫ぶのは稱名するのと同じのやうに思はれますが、さすれば別に念佛を稱へなくともよいと思ひますが如何でせう。御教示下さい。(福井・坂井・新保・南谷乙吉)

(答)

(一) 仰せの通りだと私も思ひます。然しあなたは

皇軍將士たる日本人が「佛教を知らず佛教信仰なし」と假定して居られますけれども、本當には「佛教を知つて居る」のであり生れながらにして「佛教信仰を持つて居るのであります。無論御當人も「俺は佛教を知らぬ」と思ひ「信仰を持つて居ない」と思つて居るかも知れませんが、それでも立派な佛教主義者なのであります。何となれば私達日本人は祖先以來佛教を信じて來たのですから、私達には立派に祖孫を一貫したところの佛教思想を遺傳されて居り且つそれを子孫へ遺傳して行くやうになつて居るのであります。事實上私達は佛教思想を離れて生活することも出來ず思想することも出來

ないのであります。日常使用しつゝある言葉の如きも佛教語か若しくは佛教思想に關係した言葉であつて佛教を離れては語ることさへ出來ないのであります。

獨逸のカイザーリンクと云ふ文豪は「日本の婦人は生れながらにして佛教主義者である。その柔和な隱忍性と、その無我的内的性に於て日本藝術家もまた佛教的である」と云つて居りますが、それは獨り日本の婦人や藝術家ばかりでなく、日本人は凡べて皆な生れながらにして佛教主義者なのであります。日常生活に於いて他の民族と比較すれば極めて明瞭なことであります。一旦緩急ある場合には殊にあさやかに佛教精神が顯はれて參るのであります。

この故に佛教信仰がないのではなく濃厚に遺傳されて居るのですから、何が眞剣な事件にぶつかる、平素隠れて居た思想もグーッ

と芽を出し生長して來るのです。ですから戦闘に参加すると立派に生死解脱の心境を體驗することが出來るのであります。

(二) 今から四十年程前に頻りに「大我」と云ふことが流行したことがあります。それは倫理學說に刺戟されたからで、佛教者も亦たそれに乗つて「宇宙の根本實在」を考へそれを「大我」と言つて居たものさへ出て居ましたが、元來無我を説く佛教に「根本實在」だの「大我」だのと言ふのは一寸可笑しいのですが、即ち三法印の一である「諸法無我」に背反した考へであるからむしろ非佛教的な思想でありますけれども、無反省のままに時流に乗つてその方が分り易いと思つて誤つて使用したのであります。

然しあなたの御氣持はさう云つた意味でなく唯だ臨終の時を形容したものとして使用されたことと存じますし、御氣持もよく判りま

すが、然し無量壽なる宇宙の大自然に歸一する氣持と均しい氣持で「萬歳」を叫ばれるならば、あなたの仰しやつたことに毛頭異存はありませんが、ふるが故に念佛もいらぬ信仰もいらぬ宗教もいらぬと云ふやうなことになりますならば、甚だしい間違ひになります。何となればそれでは比較するものがなくなり、標準とするものがないからであります。

宗教の目標は人間の理想とするところと均しいものであります。が、若し宗教理念が日本國體觀念と相反するものならば、日本としてそれは許されないものであることは申すまでもありません。正しい宗教は我が國體觀念を明徴にこそすれ、相反するものでありませぬが、それだからと云つて國體觀念さへ明らかになれば宗教の信仰などいらぬと斷定することは出来ないのと同様に人生の目標を正しく指示し、それを正しく理解せし

むるものが宗教なのであります。單に理論で國體觀念を明らかにしやうとしても、中々深い理解は出來ません。何處までも個人思想がともすれば盛頭して來ますからです。然るに宗教の信仰に依れば感情的に柔かく國體を理解して行け

婚家の宗旨と信仰

(問)

私は現在の家に嫁してから、當家が日蓮宗なので困つてゐます。私は子供の頃よりお念佛によつて育ち、親も老母も熱心なお念佛信者でしたが、當家に來てから何うもお題目が口に出ません、一體何うしたら宜しいでせうか、私にとつては自分の信仰を生かしてゆきたいと思つてゐます。(埼玉縣、湯川きぬ子)

(答)

誠に難問で實は御返事に困りました。日本の家族制度の上から申しますと、一家の者の信仰がバラバラではいけない

るから、つまり翼賛する立場に於いて宗教信仰は極めて大切なのであります。この故にすぐ均しいならば、「しなくてもよいではないか」と考へるのは行き過ぎであつてよろしくありません。

のです。皆な同じ信仰であつて欲しいのです。その意味から云ひますと、貴女の婚家が日蓮宗ならば日蓮宗になるのが本當です。ところが日蓮宗に限つたわけではありませんが、如何に家の宗旨だと云つても正しくないものであるならば同じ信仰になれとすゝめるのは誠に氣の毒でありますし、眞の同情がないと申すべきです。

私には何うも貴女に日蓮宗になれとはすゝめ切れません。私の考へでは日蓮宗は護國教の態度を取つて居るけれども、元來は天台法

華の思想ですから大體支那式であつて、日本の色彩を加へてはありますけれども、基礎が圓融思想ですから何うも日本的になりかねる點があるので、本當のふるひにかけて見ると果して何うなりませうか。本當のふるひにかけると或は取り除かれねばならぬことになるかも知れません。日蓮宗内部で皇道教としてあふ合はぬかの議論も行はれたことがありますが、まだ急ではないでせうが、再批判された時、何うなるか、日蓮宗の中には淨土教的な意味もありますから、その點を活用すればよいかも知れませんが、元來成佛主義の宗旨は皆な日本的に見てまづいす。だから成佛主義の宗旨は訂正されるか淘汰される運命にあると思ひます。是の故に何うも日蓮宗になりなさいとおすゝめする勇氣がないので、一寸御返事に苦しんで居る次第です。何うぞあしからずお許し下さい。

宗教隨筆


 系山天真文
窪田五雲画

整理されてゐる模範的の室を見て、痛く感心し乍ら、老僧に案内されるまゝに、いきなり戸棚を空けると、豚珍が飛び出て、皆吃驚するやら、可笑しいやら、老師は頭を掻く、提灯振右衛門氏は悦ぶ、豚珍は戸惑ひすると云ふ珍風景です。

「やつぱり、キヤラメル教育と云ふ奴ですな」と云ふ振右衛門氏の述懐に、流石に一時は老僧も頭を掻いて苦笑してゐましたが、別に怒らふともしません。

いつもの様に優しい温顔に、微笑さえたゝえて、豚珍や、こんな處へ寢ては風邪を引くよ、人間は働いたり、勉強したりした丈けでは生きてゐられない。寢る事に依つて亦働けるのだから、寢るのに遠慮はいらないよ、睡むかつたら、こそ／＼寢ずに正々堂々と寢る事だよ、寢る場所と時が悪いから人に笑はれるのだよ」と優しく云はれ、ば云はれる程、豚珍は氣極りが悪いのです。

「こんどは正々堂々と寢ます」

「何も寢るのに正々堂々と斷る必要は無いがね」

老師「時に、あの御内佛に上つてゐた御饅頭が、ちよい／＼雲隠れする様だが、ありやお前達喰べるんぢやないかな!!」

豚珍「いゝえ僕は喰べません」

老師「そうか竹林は如何だね」

竹林「飛んでもない、私は一つも口に致しません、多分鼠の仕業でせう」

老師「そふだらう、それで衾も大いに安心した、此の頃は太分鼠が出るそうで、猫入らずを入れて置いたが!!」

竹林「えゝつ!! 済みません／＼、私はあれを喰べてしまつたんです、私は、如何したらいいでせう」と泣き顔です。

「アハ、大方そんな事だと思つとつた。鼠は鼠でも頭の黒い鼠で似たり寄つたりぢやが、猫入らずは入つておらんから心配せんでよい、だかな、自分の事を云ふと何だが、衾が十一歳の時、何とかして一人前になりたいものと、江戸に上ると云ふ十九歳の若僧玄幽に連れられて、郷里長崎から歩いて江戸へ上つたのであつたが、玄幽和尚、途中氣挫け、愛郷の念歎難く、多少なりと餞別貰つて出て來た身故、心を取直

愛國機「明照號」を獻納

淨土宗報國會本部では總本山知恩院、大本山増上寺、同金成光明寺、同知恩寺、同清淨華院と協同して、愛國機「明照號」を獻納すべく、淨土宗寺院及び檀信徒から獻納金を勸募した。申すまでもなく悽愴苛烈なる決戦に於て米英を撃滅するため如何に航空機が重大であるか、われわれの腦裏から一刻も離れないことである。航空機の數さへあれば……と無念の齒を喰ひしばつて死闘奮戦してゐる將兵の聲を聞いては、われわれとしてはじつとしてほゐられない。大詔奉戴二周年を記念して發願されたこの愛國機「明照號」獻納金勸募が發表されるや、全寺院、全檀信徒は舉つて奮起し、今や切期日三月二十五日を前にして赤誠の結晶たる獻納金が各教務所から報國會本部宛に陸續と集つてきてゐる。この分では豫想金額をはるかに突破すると思はれるが、しかしこの獻納運動をこれだけで終らせたくない。第二回第三回と次々と續けてもらひたい。われら微力ながらいつでも相應の資金を差出したいと期してゐる。

して江戸へと歌めたれど、玄幽些かも耳に傾さず、思えば自分も年少の事故何となく心細くなり、どんな生活でも、生れ故郷に限ると共に吾家へ戻つた處。

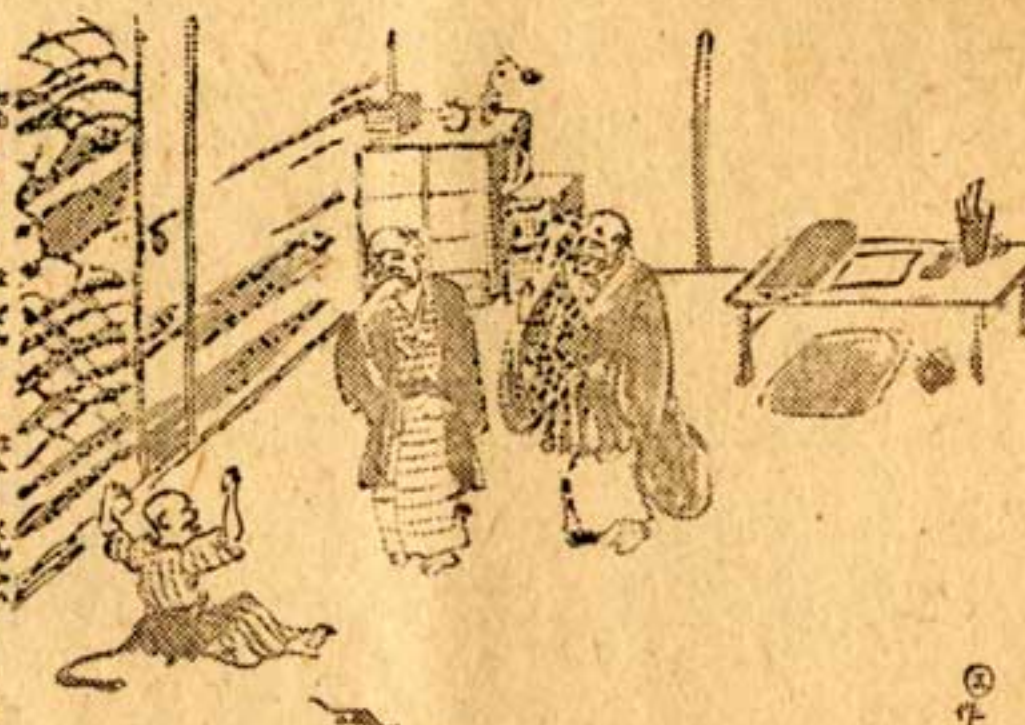
「お前は何の爲に學問修業するのです、母が斯ふして苦勞してゐるは、お前が他日業なつて歸る日を待つてゐればこそです、思ひを二つにして大切な志を挫き修業を中途にしたならば、母の辛苦は凡て水の泡です、この様な道理の分らぬやうなお前は今日限り親でも子でも有りません、かうして此處まで來る事が出來たのですから、獨りで行かれない事はないでせう、し、そう云つて私の母は膠なく私を突き離した、そして泣きぢやくる私を戸外に立たせたまゝ戸を閉ぢて再びその顔を見せなかつた。私はたよる總てを失つて、自らを救ふものは自らより他にないと其の時堅く決心して、泣く／＼毎日歩いては泊まり、泊つては歩き、エ、月餘掛つて品川の宿にたどりついた。行き交ふ雲を見ては、あれは故郷から流れて來た雲ではないかしらんと人知れず思ひに洗んだ事も有つた。

新來三年物言はずと云ふわけで、板の間に三年、座はらされた辛い事も有つたが、此處に掲げてある額の句「世の中の忍ぶ三年は數ならず

岩の上にも萬歳の龜」は當時師匠が激勵の爲書いて貰つた物である。

御蔭で三千人の學寮の寮頭となり、或日書齋で書見をしてゐると、乞食の様な姿の者が訪ねて來たが

⑤



乞食に知

人は無い

等と、良

く／＼見

れば、昔

別れた玄

幽であつ

たが、昔

を偲んで

感無量な

ものが有

の新しい教育を受けるお前達、よく聞き分けて、今日の學問は、名と利の爲の學問で有つて道の爲の學問では無い、斯うした學問の爲に往々にして、利の爲に、親とも争ひ、不孝をする人間を送り出し兼ねない。又學問も無いが親に孝なるものが有る。

これは道らしい理窟は知らないけれど親子の情で子たるの道を知つて孝行を盡すのである。學んで不孝な人、ます／＼其の不孝を増長し、學ばずして孝行の人、いよ／＼其の孝を勵むと云ふ事になる、學識あるものは遂に無學の村夫婦人に劣る事になるものだから、それを思ふたら、生きた學問をしてお呉れ、五歳七歳の子供だつて今日教えられ／＼ば、明日は憶えた通りを誦ふ。そして哀れな芝居を演つて見物を泣かす、泣かす子供は悲しいとも、何とも思つてゐない。只教えた通りを演つてゐるに過ぎないのである。只知つて心に知らないのである。心で本を讀み、身も心も打込んで一心に勉強なり、仕事をし得てこそ本當に力強く生き抜ける人なんだよ、こせ／＼して隠れた事をして儲かつた様な積りである事は窮局は一番不幸な人生なんだよ」としんみりした老師の言葉に、豚珍も竹林も、自づと頭が下つて來るのです。(其の七)

民族を越へて

陸軍中尉 石原 愕堂

史上空前の盛儀であつた大東亞會議が開かれ、大東亞共同宣言が發表された。これによつて大東亞諸國の共存共榮の原則が明示され、また諸民族が一つになる一大家族主義の道が開か

俳 壇



名古屋市 熊澤 秀國

山芋堀り蛇をからめて歸りけり

明治節明治の人の老にけり

鷗どつと来てより秋の三好夏生

養へる命に大き多来る

富士見たさにも一夜とまる時雨

うちつとく茶の花日和病よし

秋風や雲井にちかき雁の聲

いさゝかの炭をわかつて爐を開く

籬越えて隣りへのびる南瓜かな

露時雨小雀の群のわたり來ぬ

れて、云ひ知れぬ歡喜と希望に燃えてゐる。支那方面の戦線にあつて活躍した友人から手紙でよく「中國無名勇士戦死之地」「故中國勇士之墓」と簡單ながら墓標がたてられ、その傍に南無阿彌陀佛、光明遍照十方世界の塔婆があげられてゐると云ひ、通りがかりの兵士が合掌して立ち去る姿もみかけられると云つてきた。しかし次の話はわれわれが實際に嬉しくて涙を流した住民の温情なのである。第二次バタ

の元氣な顔はその日以來見られぬことゝなつてしまつた。われわれは墓標をたて眞紅の佛桑華を獻じ、最後の捧げ鉢をして、更に仇敵を追つて前進を續けた。

それから數ヶ月経つて部隊は再び〇〇河を渡ることになつた。かつての激戦の地、A中尉の墓標のある地點に廻り道をして立ち寄つた。焼け残つた僅か數軒の部落には住民が住んでゐた。強烈な太陽に汗を流して急いで行つた。するとA中尉の墓、われわれが建てた白木の墓標は、見事にあまれた竹垣で圍まれ、周囲がすつかり清められ、墓前には新しい花までが手向けられてゐた。誰れが墓標を保護してくれたのであらうか。われわれは感激に涙を新たにし再び捧げ鉢をして戦友の冥福を祈つた。それと同時に親身のやうな温い情けを注ぐ住民たちに限らない感謝の念を捧げた。

こうした民族を越へた住民の宗教心に守られていつも清らかに永へに保護されてゆくに相違ない。われわれがこの地を三度詣でるのは何時の日か判らぬが、戦友よ皇國使命の達成せぬ内は、例へ護國の鬼となつてもこの地を離れるもでない。心安く地下で見張つてゐてもらひたい。我々は歩きながらこう念じたのであつた。

くさめして淋しく寺の留守をもる
小梅市 平井 正念
ゴム靴を並べてぬきき端かな
岩國市 長岡 白朝
大根洗ふ水つぎ／＼に澄みにけり
岡谷市 久保田 潤
忘れたき思ひにひとり炭をつぐ
東京市 山本 竹泉
息白き壯行會の答辭かな
豊中市 杉田 秋晴子
歸り來し家に聲なき寒さかな
新木縣 大輪 清
ひと枝の紅葉さす部屋電氣つく
高岡市 内山 信堂
五位ねむる枝にたわ／＼や烏瓜
金澤市 藤田 進
病みてゐる人に見よとて窓の月
京都市 永田 七郎
街角を曲れば月のほりをり
比叡市 山本 眞瑞
集ひ來て夜涼の兵の樂しけれ
官廳ハガキに一回二句以内
投稿規定 送ること



葦間あしに月つきやどる

法然上人法語解説（其二五）

中村 辨 康

法語

念佛は様なきをやら
とす。たとひらに佛語
を信じて念佛すれば往生するなり。

南無阿彌陀佛といふは別したることに思ふべからず。阿彌陀ほとけ、我をたすけ給へといふ言葉とこゝろえて、心には阿彌陀ほとけ助け給へと思ひて、口には南無阿彌陀佛と唱るを三心具足の名號とまをすなり。

人目を飾らずして往生の業を相續すれば自然に三心は具足するなり。たとへば葦の茂き池に、十五夜の月のやどりたるは、よそにては月やどりたりとも見えねども、よくよく立ち寄りて見れば、葦間を分けて宿るなる。妄念の葦は茂けれども、三心の月は宿るなり。

（法語抄百三——百五諸人勸化の御詞）

解説

私なども信仰上の問題をゴタゴタといろいろに申して居りますが、それは要するに信仰

に入るまでの前提に過ぎないものであつて、この御法語のやうに「様なきを様とす」と言ふのが本當の信仰の「極致」でございます。「様」とは「様相」又は「態様」などと云ふことで、信仰の状態とか様子とか若しくはその内容理念とか言ふことであらうと考へますが、畢竟そう云ふことは單なる理解でありまして、畢竟それは概念であつて信念とは申されません。羅漢のことを一名「無學位」とも申しますが、それは「學」即ち概念としての「學問的欲求」がなくなり、體驗上の「無上學」が是から始まらうとすることを指すものであります。それは眞の信仰に入つた時には智的方面には一種の「充足感」を覺えるからであります。もうこゝへ來ると學問ではありません。學問が不必要と云ふではありませんが、専ら體驗の上に眞の學問が始まるのであります。それですから「様なきを様とす」と

言はれるのであります。唯だ「平に佛語を信じて」と言ふ、それが「様なき」ことであり「様なきを様とする」ことであります。これが出來たらもう問題はありません。問題は全部解消であります。即ち佛語のまゝに南無阿彌陀佛を唱へよと云ふのですから、そのまゝ素直に「阿彌陀佛」に歸命する氣持で南無阿彌陀佛と唱へさへすればよいわけであります。ですから唱へれば「どうなる」とか信すれば「かうなる」とか云ふやうな穿索や「有所得」の氣持は絶対に要らないのであります。それはいろは歌に言ふところの「有爲の奥山」であります。そんなところにはこたはつて居ては「京」即ち淨土に入ることは出來ません。かくて南無阿彌陀佛とは「阿彌陀佛」に素直に「南無」する氣持を聲に表現したまでのことであります。表現方法としては必ずし

も口業のみに限りませんけれども、口業が一番手取り早いから、口業を以て最低の標準點と定めたのであります。無論意業が伴なはなくてはなりませんし、身業の出来る人は無論身に契つた業をしてよいのであります。則ち念佛心を以てなすところの三業四威儀は皆な廣義の念佛だからであります。

たゞ問題はそれに三心が具足するか何うか。それだけが大切であります。三心とは引きくるめて言へば如来様の淨土を戀ひ慕つて真心から如来に歸依信順することでありまゝす。ですから信仰人に取つては別段なこともありません。つまり本心からの叫びであればよろしいからであります。ところが人間と云ふものは妙なもので「人の間」と書いてあるやうに、何時も獨り立ちは出来ません。いつも他の人々に掣肘されてお體裁を飾りたがる氣になるものであります。頑固な子供にさへ多少のはいかりを持つものでありますから、況して大人の間にあつては複雑な心が働いて常に取りつくろひが自然に出て来るものであります。即ち誰でもが内は虚假の有様ですけれども外を賢善の如くよそほひ少しでも實質以上にかざりたい氣持になるものであり

ます。誠にイヤなことですが、これも一種の人間共通の本能的な氣持でありませう。

然しながら信仰は決して他人の爲のものでなく自分のものでありますから、何も敢へて人目を飾る必要もありませんし、自分の本心の問題ですから他人から認められやうが認められまいが問題ではない筈であります。然るに私達は兎もすれば他人に認められたい氣持を起し勝たのです。そこを法然上人は御法語ではつきりと例を以て私達をいましめ且つ私達の弱い心に勇氣づけて下さつて居られるのであります。即ち十五夜の月影が葦の茂つた池水にうつつて居りますのは事實でありますから、もうそれでよいわけでありますのに、葦が茂つて居ります爲に一月月影がうつつて居るやうには見えないところから何とかして月のうつつて居る有様を見せたいと考へます。そこでそれが爲には葦を刈り取らねばなりません、葦を刈り取ることは極めて困難なことですから何とか無理をしてそれを見せなければなりません。然しそれは事實に反することであつて、實際には出来ない相談なのであります。ですから絶対に無理をする必要はないのであります。よく／＼接近して見て

貰ひさへすればよいのであります。そこをよく教へて居るのがこの譬であります。

またこの御法語のもう一つの意味は、よく妄念雜念が起つて困ると申す人々に對してのもので、たとへ妄念雜念の葦が茂くはえて居ても葦間を分けて月が池水に宿つて居るやうに、こちらに眞實心の池水さへあれば雜念妄念がむらがり起ると雖も、その雜念妄念の間を分けて、正念の念佛が心の水の中に出て来るものであることを教へて居るのです。

雜念妄念があればこそ、それに氣がついて「あゝこれはいけない」と思ひ「かゝる淺ましい私です。どうぞ如来様の大悲に依つてお救ひ下さいまし」と反省しつゝ至誠心のこもつたお念佛も出て來ます。それが即ち「妄念の葦は茂けれども三心の月は宿るなり」と仰せられたことであります。

この「葦間を分けて月のやどる」と言ふ御法語は何度讀んでも新らしい氣持を以ていつも「有り難く有り難く」拜讀される御言葉であります。

誠に淨土門の有り難さ！。易行道の有り難さがつく／＼と思はれるのであります。本當に有り難いことです。

文學博士 山本幹夫著

法然佛教と

わが國體思想

A5型一六二頁クロース装

定價二圓二十錢

送料十五錢

神國日本の教法たる法然佛教を歴史的に解明した時局下必讀の書。殘本僅少至急御申込を乞ふ。

發行所 法然上人鑽仰會

郁芳管長猥下名號御執筆

淨土宗日常勤行式

頒價八十五錢（送料共）

折本、縦五寸五分、横二寸五分

本文二號活字、總假名ツキ、特に一般信徒用として編纂されたもの。

申込所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京八二一八七番

編輯後記

◇本號も亦發刊が遅れ、御迷惑をおかけ致し申し譯ありません。お問合せが殺倒し恐縮してゐます。

◇本號からまた減頁の止むなきに至りました。會員數だけは發行しなければならぬためで、悪しからじ御諒承下さい。

◇決勝の年としていやが上にも緊張の度を加へてゐます。それだけに又信仰、修養による精神的全力も要請されます。各方面から種々激勵をいただき感謝してゐます。

◇眞野正順先生からは來月から玉稿がいたゞける豫定です。折角の御奮闘を期徒してゐます。

◇辻重光氏は今度新任務につき、いよいよ元氣旺盛です。先日同氏留守宅をお見舞したところ、昨年度は衣料切符を一點も使はなかつた由にて、「これをせめてもの御奉公の一端です」と聞き、成程と感心しました。（村瀬）

淨土 二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和九年一月二十日印刷納本
昭和九年二月一日發行

（定價十二錢）

東京芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼 眞野正順
發行人

東京都芝區芝公園十五號明照會館
印刷人 赤尾光雄

東京都牛込區西町七番地（東京二）
印刷所 大日本印刷株式會社
配給元

東京都神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所 法然上人鑽仰會
東京都芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番
會員番號二三〇〇〇七

「淨土」購讀規定

定價 金十二錢

（送料一錢）

會費 金一圓五十六錢
一ヶ年（送料共）

振替掛込みは十錢増のこと

中村辨康著

新刊 信仰問答

賣價三圓十五錢 (送料十五錢)

「淨土」創刊以來連載の「信仰相談」から主なもの約二百を選び系統的に配列しました。誰もが知りたい難問疑義に對し明解を與へた興味深い活きた信仰案内書です。問ふ者が切實な悩みや疑ひをぶちまけてゐるだけ、答へる者は親身になつて懇切に指導してゐます。

總ゆる問題を網羅せる解説

發行所 法然上人鑽仰會

東京都芝區芝公園明照會館
振替東京 八二一八七番

東山中
學校長

須賀隆賢著・木村毅序

全法然

開宗七百五十年
記念出版
實費送料共
一圓九十錢

法然上人！智慧第一の御坊と讃えられ、法然具足の聖と崇められた上人は、その聖を去り、その智慧を捨て、凡愚と憂ひを願ち、衆生と歎きを同うし、人間救済の新宗教を立てられた、傳記の小説的記述と、平明なる教義の解説と嚴正たる批判と、敬虔なる讃仰と、詩趣溢るゝ感想とを渾然融合せしめたる名著、一卷よく、上人の全貌を悉すところ、即ち「全法然」の題名ある所以、一讀よく上人の偉大に參ぜしむ。

右絶版書ですが手許の残本希望者に願つ即刻申込まれよ

申込所

京都市下京區
東洞院通鹽小路

三寶社

振替京都九四九三番

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十九年一月廿日印刷・昭和十九年二月一日發行

淨

土

第十卷 第二號

定價金十二錢 (送料一錢)